

### <前期：キリスト教と近代的知>

オリエンテーション——「キリスト教と近代的知」

1. ティリッヒと近代的知
2. マクグラスと自然神学構想
3. ティリッヒとカント1
4. ティリッヒとカント2
5. マクグラス——自然神学と真理
6. ティリッヒとフィヒテ
7. ティリッヒとヘーゲル1
8. ティリッヒとヘーゲル2
9. マクグラス——自然神学と美
10. ティリッヒとシュライアマハー
11. ティリッヒとシェリング
12. マクグラス——自然神学と善
13. まとめ

## 13. まとめ—近代的知とキリスト教

### (1) 近代とキリスト教

#### 1. 19世紀のキリスト教思想史の意義

「近代」という時代に固有な問題の核心部分が明確になった。本格的な対応。

↓

近代世界：キリスト教を歴史的に前提としつつも、キリスト教から離脱する。

(近代とそのサブシステムの関連性を緻密に議論すること。)

#### 2. 理性の自律性（自由、人格、精神、歴史）と自然

実定宗教と自然宗教（理性宗教）

狭義の合理性・抽象的 → 本質主義とその解体

合理主義の力と限界

自律と他律という図式の克服

→ 「宗教と科学」という問題

文明としての科学技術（狭義の知の問題ではない）、自然神学

3. 現代神学の状況。バルトやティリッヒ、ブルトマンなどの 20 世紀の指導的神学者の死後、つまり 1970 年代以降、多様な神学的諸傾向へと急激に分解し、今や混沌とした状態にある。その中で、哲学や倫理の場合と同様に、伝統的なキリスト教神学へのラディカルな批判が様々な仕方で生じており、神学においてもポスト・モダンは今や一つのキー・ワードとなっている。

↓

この状況下において必要な作業の一つは、近代世界においてそもそもキリスト教とその神学とはいかなるものであったのか、またポスト・モダンに対するモダンとは神学的に見て何だったのかを、正面から論じることである。この神学とモダンとの本質的関わりを理解する上で、避けて通れないのが、19 世紀の近代ドイツ神学である。

21 世紀の現代的状況から、近代ドイツの神学思想を批判的に総括することが必要なのである。

## (2) 本質主義から実存主義へ

### 3. テイリッヒによる 19 世紀思想史の概観

シェリングをカント以降のドイツ観念論の文脈に位置づけると共に、とくに後期シェリングの思想をヘーゲル的な本質主義に対する批判としての実存主義の起点と捉えている。

### 4. 「広義の実存の哲学」(in a larger sense) : そのもっとも典型的な思想家であるキルケゴール(狭義の実存主義)から、後期シェリング、フォイエルバッハ、マルクス、ニーチェから、さらにはディルタイ、ベルグソンなどの生の哲学やウィリアム・ジェイムズのプラグマティズムまでを包括する。

人間の現実や実在を本質存在から区別された「実存」(現実存在) — この実存の内容をどう理解するのか、つまり実存の基本的メルクマールを何にするかについては様々な立場が存在する — として規定し、人間存在の生きた現実を合理的に把握可能な諸本質とそれらからなる論理学の体系とから演繹することはできないとする思想的立場。



論理体系において合理的に演繹される諸本質から人間を理解する立場(ヘーゲルに典型的に見られる汎論理主義)を哲学思想に広く見られる主要な思想的動向=本質主義。

波多野:イデアリスム

### 5. 本質主義への反抗の起点として後期シェリング。

cf. 近代批判とポストモダンとの相違

「今日、実存哲学と呼ばれている特別な哲学の在り方は、ワイマール共和国下のドイツ思想の主流の一つとして現れた。その指導者にはハイデッガーやヤスパースといった人が数えられる。しかし、その歴史は少なくとも一世紀、1840年代まで遡る。その主要な論争はシェリング、キルケゴールそしてマルクスといった思想家による、ヘーゲル学派の支配的な<合理主義>あるいは<汎論理主義>への鋭い批判において定式化されたのであり、次の世代では、ニーチェとディルタイがその提唱者に加わるのである」

(Tillich, 1944, p.354)。

### 6. テイリッヒの捉える「広義の実存哲学」の特徴は、それに属するとされた諸思想家において確認される近代的な自己意識の明証性への懐疑あるいは批判に見ることができ。人間の意識が、無意識、階級性、力への意志など直接的には意識化されない要因によって根本的に規定されており、自己は自己自身にとって不透明であるという議論は、19世紀後半から21世紀にかけての現代思想の有力な潮流を形成している。

### 7. 消極哲学と積極哲学の相補性

「ヘーゲルの死後長い間、彼はヘーゲルの最大の批判者であった。……しかし、シェリングはヘーゲルと自らが行ったこと(同一哲学)を廃棄しなかった。彼は本質の哲学を保持した。これに対して、彼は実存の哲学を対置した。実存主義はそれ自身の足で立つことのできる哲学ではない。それは常に、現実の本質構造のヴィジョンに基づいている。……この意味でそれは本質主義に基づくのであり、それなしには生きられないのである。……シェリングの後期においては、実存主義に主要な強調点が置かれていた。しかしながら、本質主義は展開されなかったものの、その前提とされていたのである。」(Tillich, 1962/63, p.438)

### 8. 思想・学は本質主義を脱却できるか。

生と学の緊張。

S. Ashina

9. ティリッヒの根本問題：「一元論的世界観と二元論的世界観との対立はキリスト教的宗教にとっていかなる意義を有しているのか」という論文(1908)における「一元論と二元論」という問題設定、あるいはまたハレ大学に提出された神学学位論文「シェリングの哲学的発展における神秘主義と罪責意識」（1912）における「神秘主義と罪責意識」という問題設定によって示された根本的問いである。
10. 「神秘主義と罪責意識、絶対者との統一の感情と神との対立の意識、絶対的精神と個別的の精神の同一性の原理と聖なる主と罪深い被造物の間の矛盾の経験、これら二つのものの間のアンチノミー、これが教会の全時代にわたってこれまでの宗教的思惟がその解決のための努力を続けてきた、そしてまた今後繰り返し努力しなければならないアンチノミーなのである。」(Tillicn, 1912, S.28f.)
11. 「神秘主義と罪責意識」という問題 → 神と世界の関係、あるいは神と人間の関係という、まさにキリスト教思想の中心的問い。  
 → 「一と多」「悪」 → 「創造・終末」・救済の経緯  
 cf. グノーシス主義、新プラトニズム
- 1) 思想史の概観（古代ギリシャからドイツ観念論まで）  
 神と世界の間をめぐり議論を一元論と二元論の類型にまとめる (ibid.,S.34-60/102-121)。
- 2) 一元論と二元論の関係とそれらのキリスト教神学に対する意義を体系的に検討 (ibid.,S.60-91/121-152)。  
 アウトライン  
 「物質的一元論→二元論的批判→精神の目的論的一元論→目的論的一元論の高次の宗教的段階」。
- つまり、大きく一元論と二元論という二つの類型を設定した上で、前者は物質的あるいは自然的一元論（素朴な実在論的一元論）と精神的あるいは目的論的一元論にわけられる。そして、キリストのペルソナ理解（キリスト論）にふさわしい形へと、つまり高次の宗教的段階へと精神の目的論一元論を変革するという課題が提示されるのである。

### (3) 真理・善性・美から生の全体性へ

12. マクグラスの自然神学構想とその具体化に向けた課題
- ・啓蒙的近代とその自然神学の批判的再考  
 文明の質の問題。ポスト・コロニアリズム。  
 自然の復権あるいは身体性の復権
  - ・知の問題を、生の全体性（真・善・美、理論・実践・想像力）の中に位置付け直す。  
 cf. ハイデッガーのカント解釈のライン  
 構想力＝時間性から、感性と悟性へ。  
 言語論再考
  - ・伝統の特殊性から出発し伝統の自己超越性における普遍性を展望する。  
 解釈学とコミュニケーション理論を統合すること。  
 多元性という状況
13. 自然神学とは、根本的には自然についての特別の人間の知覚なのであって、その知覚は、キリスト教神学の洞察によって可能になり引き出されたものなのである。この伝統によって形作られた「見る」という行為は、観察されたものの合理的説明に限定されるものではなく、これを超えて、人間の想像力と情動への影響を含むに至る。われわれの合理的で美的な、そして道徳的な洞察はすべてキリスト教的伝統によって形成され、

今この世界との接触へともたらされる。この世界こそが、観察され正しく理解されるべき世界なのであり、その中で、われわれは行為するように求められているのである。

14. 刷新されたキリスト教自然神学は、世界についての経験——合理的であろうと、道徳的であろうと、美的であろうと——の上に投げかける概念の網をわれわれに与える。その結果、われわれは少なくとも世界の外見上の矛盾に耐え、世界の未来の変容に憧れることができる。それは、われわれが自然の特異的なものを肯定し尊重することを可能にする。しかし他方で同時に、その表層の下に存在する真理と実在のより深いパターンを顕わにするのである。
15. われわれが着手したアプローチはますます重要になってきているキリスト教神学と自然科学との対話に対して明らかに関わり合っている。それは、神学と科学の両側における高められた知的豊かさと創造的な識別という可能性とともに、異なった出発点と異なった前提とから自然界に共通に関与するという可能性を提供する。われわれが概念を規定しその適用について明確に述べてきたように、自然神学は、詩人の想像的世界との関わり、科学者の細心の自然観察、そして神学者の神についての洞察とを一つにまとめることを可能にし、その諸部分の総計より大きな全体性へと導くのである。自然神学のこの拡張された洞察は、長い間別々の道を進んできた議論や討論を再統合する鍵を握っているかもしれない。

コミュニケーション合理性

#### (4) ティリッヒ研究から「キリスト教と近代」リサーチ・プログラムへ

16. ティリッヒの宗教思想——神学あるいは宗教哲学と限定せずに両者を包括するものとしての宗教思想——を、その中心的かつ根本的な問いから理解すること。
17. ティリッヒ研究の方法論について次の三つのポイントを指摘したい。<sup>(3)</sup>

##### (1) 批判的読解（発展史と根本的問い）

方法論の第一のポイント：ティリッヒの思想の変遷（発展史）と統一（体系的）の両面を整合的に理解し、そこからティリッヒの宗教思想の核心へ迫るという方法論的態度。  
＝ティリッヒのテキストの批判的読解。 cf. 外部視点からの一方的批判／内的視点からのパラフレーズ

- (2) 思想の発展史的研究という方法論について → 思想の諸レベルにおける発展のずれ  
時代の衝撃と思想の転換との時差

思想的伝統のマクロな動向

類型論的整理

##### (3) 根本的問いについて

ティリッヒの根本的問いから、ティリッヒは誰だったのか——ティリッヒの思想をその共時的レベルで体系的に理解することを可能にしている焦点となる事柄——を解釈する。これは、ティリッヒの思想的営みの全体を一つの連関へと統合し支えていたものは何かという問題であり、例えば、ティリッヒをキリスト教の弁証家と理解することや、意味の問い（意味への信仰・信頼）からティリッヒの諸思想を体系的に論じることなどが、この問題圏に属している。

18. 近代ドイツのキリスト教思想の際だった特徴の一つは、哲学と神学の動的で錯綜した影響関係の中に認められる。そこで、近代キリスト教神学とは何であったのか、という問いに答えるためには、ドイツ啓蒙思想からカントやロマン主義そしてドイツ観念論に至るドイツの古典哲学と、ルター派の信仰に依拠するキリスト教神学との相互連関について思想史的な考察を徹底的に行わねばならないことになる。これは、近代神学とは何

S. Ashina

であったのかを理解する上で不可避的かつ決定的な問いであるにもかかわらず、同時にきわめて困難な問いである。

19. 例えば、ティリッヒについて近代ドイツの古典哲学とルター派の神学という二つの思想史的前提が指摘できるが、それはより限定して言えば、シェリングとケーラーの関係と言い換えることができる。しかし、シェリングが制度的なキリスト教会を批判しつつもキリスト教神学の決定的な影響を受けていることは明らかであるし、また神学者として知られるケーラーもまたその思想形成の初期の時期にシェリング哲学の影響を強く受けている。したがって、ティリッヒの思想的源泉をたどる場合、ここまでが哲学（シェリング）、ここからが神学（ケーラー）という仕方で、単純化して思想の影響関係を分析することは不可能である。さらに、ここにはシェリングとケーラーだけでなく、さらに多くの他の哲学者や神学者が関係しているのである。

↓

神学史と哲学史との統合

- ・ケーラーとシェリングとの関わりについては次の文献を参照。

Hans-Georg Link, *Geschichte Jesu und Bild Christi. Die Entwicklung der Christologie*  
Martin Kählers, Neukirchener Verlag 1975, S.27-77

20. リサーチ・プログラムとしての「近代/ポスト近代とキリスト教」へ

近代ドイツ神学を十分な意味で研究しようとする場合、こうした思想史の錯綜した影響関係を、全体として視野にいれながら、個々の思想家の思想形成を一つ一つ解きほぐしてゆかねばならないことが明らかになる。ティリッヒ研究も以上の思想史研究の文脈に位置しており、ティリッヒとドイツ古典哲学との関係という問題設定は、いわばその一つのモデル・ケースと考えられる。これまでは、主としてシェリングとの関わりについていくつかの先駆的な研究がなされてきたが、今後は、ティリッヒとカント、フィヒテ、ヘーゲル、シェライエルマッハーといった思想家との関係も十分に視野に入れて研究を押し進め、その後にもう一度、シェリングとの関係を再考し、18～19世紀にかけてのドイツの哲学思想との、さらには20世紀のドイツの神学思想との関係を含めた思想史全体の理解に迫らねばならないであろう。→ この講義の位置！

21. 19世紀の問題状況に「多元性」と「言語」「自己超越性」という問いを重ねること。

↓

後期へ

### <方法論的考察と聖書の社会論>

#### I 象徴・言語・システム

1 象徴・言語 1	9/28
2 象徴・言語 2	10/5
3 システム・宗教 1	10/12
4 システム・宗教 1	10/19
聖書の社会論 1——家族	10/26

#### II レトリック・メタファー

1 レトリック・メタファー	11/2
2 レトリック・モデル	11/9
3 イエスの譬え	11/16
聖書の社会論 2——経済	11/30

#### III コミュニケーション・解釈

1	伝統と意味の地平	12/7
2	多元性と対話	12/14
3	イデオロギーとユートピア	12/21
	聖書の社会論 3 ——政治・国家	1/11
IV	宗教と文化	
1	宗教と文化 1 ——構造	1/18
2	宗教の文化 2 ——動態・歴史	1/25
22.	「近代/ポスト近代とキリスト教」研究会	
	キリスト教と近代社会 ——経済・環境——	